

## 要 旨

本研究では、道徳の時間の中で異学年の学級同士を合同学級とし、ティーム・ティーチング(以下TT)を取り入れ、児童一人一人の道徳的価値観を深めることをねらいとした。具体的には、道徳の時間の充実を図るために、異学年学級の担任同士がティームを組み、効果的に指導を行うことと異学年の児童を互いに交流させていく手立てについて研究を進めた。

児童は、異学年での交流活動を通して、様々な人の感じ方や考え方に気付くことができ、自らの道徳的価値観を深めることができるようになった。

〈キーワード〉 ①道徳的価値観の深まり ②TT ③異学年での交流活動

### 1 研究の目標

人に積極的に関わることでよりよい自分になろうとする児童を育成するために、道徳教育における効果的なTTの在り方を探る。

### 2 目標設定の趣旨

小学校学習指導要領解説道徳編では、「道徳の時間への校長や教頭などの参加，他の教師との協力的指導，保護者や地域の人々の参加や協力などが得られるように工夫する」<sup>1)</sup>とし、道徳の時間における組織的，計画的な指導の在り方が求められている。道徳の時間の指導は，児童一人一人が道徳的価値についての自覚を深め，内面的資質としての道徳的実践力を育成するという特質を十分考慮し，それに応じた指導過程や指導方法を工夫することが大切であるとされる。そこで，道徳の時間の中でTTを取り入れ，組織的，計画的に児童一人一人の道徳的価値観を深めていくことは大切なことだと考える。

これまでの道徳の時間において，1学級単位で地域の人々や保護者をゲストとして授業を行ったり，養護教諭等と協力して授業を行ったりするなど，ゲストの特性を生かした授業は多く見られてきた。しかし，学級担任同士が，同学年又は他学年の複数学級を集めて道徳の時間を実施することはほとんどなかったといえる。例えば学級に10数名程度又はそれ以下の児童しかいない小規模校にとっては，学級のみで学習を行うには教育効果の面で充実した活動にならないなど，児童が少ないという実態からの切実な課題がある。

そこで，本研究ではグループの研究テーマ，研究課題を受け，人との関わりを豊かにするTTを取り入れた道徳教育の在り方を探っていきたいと考えた。学級の枠を取り外し1つの集団にして，より多くの児童や他の教師と児童たちが関わる場を設定することで，多様な生き方や考え方に触れさせ，人間理解を一層深めさせることができるであろう。さらに，異学年で組んで行っている学校行事等の体験活動と道徳の時間を関連付け，道徳的価値に気付きやすい場面を見いだすことで，道徳的価値についての自覚をより深めさせることができるであろう。また，道徳の時間に限定せず，道徳の時間に関わる体験活動や各教科等の中でティームを効果的に組み，指導を充実させていきたい。そうすることで，よりよい自分になるために，人の考えや意見に耳を傾けることができる児童を育成できると考え，本目標を設定した。

### 3 研究の仮説

道徳の時間の中で，異学年合同でのTTを行い，異学年での交流を活性化させていけば，児童は，様々な人の感じ方や考え方に気付くことができ，自らの道徳的価値観を深めることができるであろう。

#### 4 研究の方法

- (1) 道徳におけるT Tを活用した指導について理論研究
- (2) 体験活動後の道徳の時間に取り上げる道徳的価値についてアンケートによる実態調査
- (3) 異学年での交流活動を設定し、T Tを活用した道徳の授業実践と検証、考察

#### 5 研究内容

- (1) 文献を基に、T Tを活用する意義や有効な学習形態や学習過程を探り、指導の手立てを明らかにする。
- (2) 所属校3, 4年生において、体験活動後にねらいとする内容項目についてアンケート調査を行い、児童の意識を探る。
- (3) 所属校3, 4年生において、仮説検証授業①②を行い、異学年での交流活動とT Tの有効性を示し、考察する。

#### 6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

小学校学習指導要領解説道徳編では、道徳の時間の指導における配慮とその充実のために、「道徳の時間の指導体制を充実するための方策としては、まず、道徳の時間における実際の指導の場面において他の教師などの協力を得ること」<sup>2)</sup>と記されている。これを受けて本研究では、目標に向かう手立てとして、異学年合同の道徳の時間を設定し、T Tを活用し、道徳的価値観を深めることのできる児童の育成を目指すことにした。

永田は、道徳の学習指導を構想する際の工夫として、「道徳の時間は子どもの生活を最もよく知る学級担任が指導することを中心とするが、年間の指導の一部に、例えば他の教師との協力的指導を設定し、指導する側の人的な協力体制を多様に考え、生かす」<sup>3)</sup>としている。

また、生越は、指導方法の弾力化、多様化の一つとして「多様な道徳的価値との出会いから自らの価値を自覚し内面化させるために、異学年の児童とその学級担任で行うT T指導などの学習形態による様々な指導方法も工夫できる」<sup>4)</sup>としている。

以上のことから、異学年合同での道徳の時間を設定し、異学年の児童同士で交流をさせたり、教職員のチームを効果的に組んだりすることで、児童は、様々な人の感じ方や考え方に気付くことができ、自らの道徳的価値観を深めることができると考えた。

- (2) 児童の実態と研究の全体構想

現代の子どもたちは、少子化、核家族化という社会問題や遊びの内容の変化などにより人との関わりが希薄になってきているといわれている。友達関係も固定化し狭くなりがちであり、豊かな人間関係を築くことができているとはいえない。

所属校3, 4年生の意識調査において「道徳の時間は好き」と答えた児童が76%(32名)、「道徳の時間に話し合うことが好き」と答えた児童が69%(29名)いたが、「自分の考えを友達に発表することが好き」と答えた児童は36%(15名)しかいなかった。このことからグループやペアで話し合う活動は嫌いではないが、自分の考えを積極的に友達に発言できていないことが分かり、道徳的価値について友達と真剣に話し合ったり、相手の考えを理解したり、それに伴い自分自身の考えを振り返ったりする活動が十分できていないのではないかと考えた(図1)。

そこで、児童が人に積極的に関わっていくことができるような道徳の時間にするために、学習指導要領解

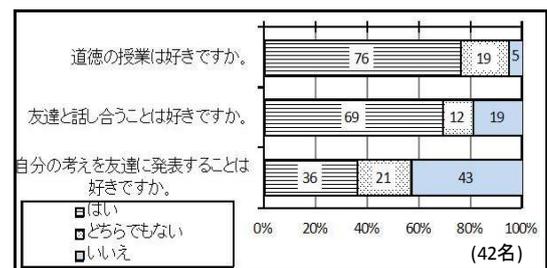


図1 事前意識調査の結果

説道徳編でも述べられている言語活動を重視すること、体験活動との関連をもたせること、多様な協力体制をつくることを主眼とすることにした。その手立てとして、縦割りグループを中心とした異学年グループでの学習の場を設定することとした。また、担任同士のチームを組み、道徳の時間の充実を図りたいと考えた。

異学年で交流する時間を設定することで、自分の考えと同学年、他学年の友達の考えを比べることができる。その上で、担任同士でのTTにすることで、異学年同士で行った体験活動の場を想起したり、資料をより読み深めたりすることができるであろう。

そのような道徳の時間にすることで、同学年、他学年の友達や担任等の教職員に積極的に関わっていかうと考える。そして、自らの道徳的価値観を深めていき、よりよい自分になるうとするのではないかと考えた(図2)。

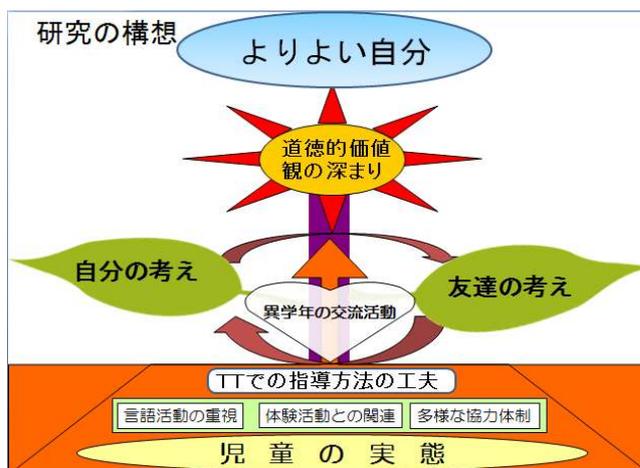


図2 研究の構想図

(3) 道徳的価値観を深めるための手立てについて

ア 担任同士でのチームでの指導の工夫

異学年合同で行った体験活動の場面の演示を行ったり、資料における登場人物の演示や教師同士の対話を行ったりすることで道徳的価値観の深まりを探ることにした。チームを効果的に組み、体験活動と関わらせた場面や資料の特徴を生かすことができれば、ねらいとする道徳的価値について身近に感じ、自分自身のことを深く考えることができるであろうと考えた。チームで授業を行うに当たり、右表のことを念頭に置き、指導の構想を立てた(表1)。

表1 TTでの指導の流れ

1	児童の実態把握
2	効果的な授業の構想
3	TTによる授業実践
4	指導の評価

イ 異学年児童による交流活動

学年の枠を取り外し1つの母集団学級とする。その上で、縦割りグループを中心とした異学年同士の少人数グループで交流活動を行わせる。同学年、他学年の友達の多様な考えに触れることで、自分自身の考えと比べ、自分の考え方との違いを見付けたり、友達の考えに共感したりすることができる。さらに、振り返る時間をつくることで自分の考えを見つめ直し、自らの道徳的価値観を深めることができるであろうと考えた(図3)。

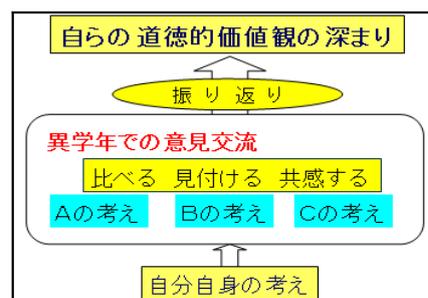


図3 異学年の交流活動

また、異学年での交流活動を有効に生かしていくために、道徳の時間の導入部分や展開部分、終末部分と体験活動とを関連付けた授業を構想した(図4)。そうすることで道徳の時間のねらいや内容が理解できると考えた。

(4) 授業の実践と考察

先に述べた手立ての有効性を確かめるために、4時間の検証授業を行った(次頁表2)。検証授業で扱う内容項目は、「愛校心」、「個性伸長」を取り上げ、児童がより内面的に価値の自覚を深められるよう、それぞれ同じ道徳的価値を扱う2時間連続での授業を行った。

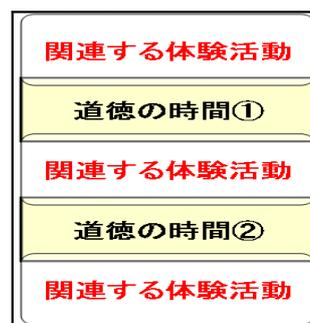


図4 体験との関連

表2 授業実践と授業の視点

	実践資料	内容項目	視点Ⅰ:TTによる 道徳的価値観の深まり	視点Ⅱ:異学年の交 流活動を通しての道 徳的価値観の深まり
第1時目	「ようむいんのおじさん」(光文書院 3年)	愛校心	○	※異学年では実施せず
第2時目	「心のバトン」(自作資料)	愛校心	○	○
第3時目	「満天の星をつくろうとした少年」(日本標準 3年) 「三年元気組」(光村図書 3年 一部改作)	個性伸長	○	○
第4時目	「つくればいいでしょ」(日本文教 4年 一部改作)	個性伸長	○	○

ア 担任同士のTTを行ったことの有効性による道徳的価値観の深まり(視点Ⅰ)

(7) 教師同士の演示や対話を基にした授業展開

授業後のワークシートとアンケートを基に、担任同士の演示や対話を行うことによる道徳的価値観の深まりを検証した。

チームでの道徳の授業を構想する上で、右表のような段階で教師同士の演示や対話を取り入れれば、効果があるだろうと考えた(表3)。また、効果的なTTを行うため、事前にシナリオ表を使って打合せを行い、本時のねらいや展開、互いの役割等の確認、修正を行い、共通理解を図った(表4)。

ねらいとする道徳的価値に気付かせるために、導入部分で事前の体験活動において振り返らせたい場面の演示による教師同士のやり取りを行った。

授業後のアンケートによると、ほとんどの児童が道徳の時間に対して高い関心・意欲を示し、事前の体験活動の内容や友達同士の関わり

に目を向けることができていた。事後アンケートの「花植え活動の演示を見てどう感じたか」という質問では、43%(18名)の児童が、「先生たちがしたように自分も協力して学校をきれいにしたいと思った」など、学校や学級を愛する心に触れる感想をもつことができていた。また、異学年の児童を思いやる感想があり、体験の想起のしやすさを述べていた。事前の体験活動の場面演示や対話活動を行うことで、ねらいとする道徳的価値観を深めることができたのではないかと考える(表5)。

表3 演示、対話のねらいと実際

	導入	展開前段	展開後段
TTで行う ねらい	道徳的価値の方向付けを行う	登場人物の気持ちに自分を重ねさせる	道徳的価値の自覚化を図る
TTで行う 演示、対話	全校花植え活動の場面演示	資料内容の場面演示	学校職員としての気持ちを示した対話

表4 授業の展開と演示シナリオ

学習活動	主な発問	指導上の留意点とT1とT2による演示
体験活動の場面を振り返り、感想をもつ。	活動はどうだったでしょうか。	体験活動から見取っておいだ場面の演示を行う。 T1「ちょっと植え方が分からないなあ。○○くん、どうしたらうまく植えられるかな。」 T2「ここに、こうやって穴を掘るでしょ。そして、根元をもってやればいいよ。」 T1「ほんとにきれいになったよ。」
登場人物の気持ちを想起する。	この話の登場人物は、どんな気持ちだったのだろうか。	資料の内容の演示を行う。 T1「用務員のおじさんが木を切ってるよ。行ってみようか。」 T2「ほんとだ。ちょっと行ってみましょう。」
実際の人物の気持ちを想起する。	身の回りの人はどんな気持ちなんだろう。	実際の人物としてやり取りを行う。 T1「ねえ、○○先生。先生は、どんな気持ちで働いているの。」 T2「わたしは、みんなが楽しいと思うように過ごせればいいなと思っていますよ。」

表5 体験活動の演示や対話を見た児童の感想(42名)

回答の分類	検証授業①後	児童の主な記述
道徳的価値観の自覚化	43%	・協力して学校をきれいにしたい。 ・花をしっかり植えたいと思った。
異学年活動で触れ合うよさ	26%	・4年生は優しいなあ。 ・3年生もがんばってたなあ。
体験活動の想起のしやすさ	21%	・こんな場面があったんだ。 ・劇があったら分かりやすいなあ。
意欲や関心	10%	・楽しくペンぎょうできるなあ。

表6 読み深めの演示や対話を見た児童の感想(42名)

回答の分類	検証授業①後	児童の主な記述
ねらいとする価値への気付き	45%	・学校をきれいにすることが分かった。 ・みんなでやるときれいになるなあ。
登場人物への共感	29%	・2人がえらいなあと思った。 ・ぼくも2人のようにがんばりたいなあ。
場面想起のしやすさ	21%	・劇があったので、気持ちを書くことができた。 ・話の内容が分かりやすかった。
意欲や関心	5%	・話がおもしろいなあと思った。

また、展開前段では、登場人物の気持ちを想起させる場面演示を行った。事後アンケートの「登場人物の演示を見てどう感じたか」という問いに対する感想から、児童は、演示を見ることで自分の体験と重ね合わせたり、登場人物の気持ちの変容に気付いたりすることができたといえる。児童にとって、資料内容の場面演示が、資料そのものの理解や道徳的価値観の深まりにつながるということが分かった(前頁表6)。

(4) 児童の実態に合わせた指導展開の工夫

検証授業②、「個性伸長」の内容項目の中で、児童の実態によってねらいを少し変えたグループ別学習を行った。この授業実践前に、事前アンケートを行い、児童の自尊意識について調査した。調査の結果、自分のよさについて記述できた児童が55%(23名)、自分のよさについて記述できなかった児童が45%(19名)とほぼ変わらない人数であった。

そこで、よさを見いだせている児童とよさを見いだせていない児童のそれぞれのグループに別々の資料で授業実践を行った。まず、全体で体験活動の想起とめあての確認を行い、次に、ねらい別のグループに分かれて学習を行った(図5)。T1が、「自分のよさの伸ばし方を知り、自分のよさを伸ばしていこうとする意欲を育む」ねらいで23名を、T2が、「誰にもよさがあることに気づき、他のよさを見つけようとする心情を育む」ねらいで19名を受けもち、それぞれのグループで自分のよさについて考えさせた(表7)。

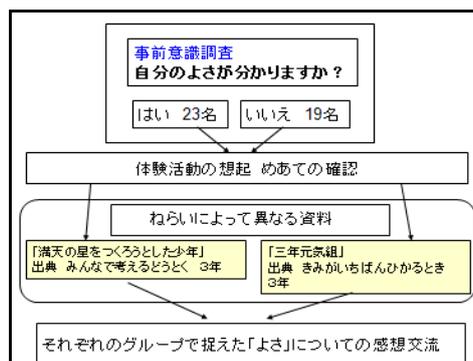


図5 実態に合わせた指導の工夫

表7 ねらいを少し変えた2つの授業展開

グループ別学習後、また全体の場で、それぞれの教室で捉えた自他のよさや、よさの伸長についての感想を出し合わせた。事前のアンケートで自分のよさを記述できていた児童たちからは、「あきらめないよさ」や「やり続けたよさ」について触れられたものが多く出された。自分のよさを記述できていなかった児童たちからは、「みんなそれぞれによさがある」というものが多く出された。

T1「満天の星をつくろうとした少年」	T2「三年元氣組」一部改作
○なぜ貴之さんは、プラネタリウムに夢中になったのでしょうか。 ・星に興味をもったから。 ・自分が好きなことだったから。 ※小学校時代の貴之さんの星に興味をもったきっかけと星に対する思いを押さえる。 ○貴之さんのよさは、どんなところでしょうか。 ・星のことをたくさん勉強した。 ・プラネタリウムづくりをあきらめなかった。 ※プラネタリウムづくりに夢をもった貴之さんに共感させワークに記入させる。 ※主人公の強い気持ちや熱意に目を向けさせ、前向きな生き方について考えさせる。 ○資料を基によさについての感想を書く。 貴之さんの思いをよさとして捉え、よさを伸ばしていた生き方に共感することができる。	○やりたいことを言い合いながら、みんなはどんなことに気付いたのだろうか。 ・～さんは～が得意なんだ。 ・みんなそれぞれ得意なことがあるな。 ※登場人物が授業参観でやりたいことを考え発表させる。 ○先生に、「それぞれいいところをもってるのよね。」と言われたとき、みんなはどんな気持ちだったでしょう。 ・自分にもいいところがあるんだ。 ※みんなの気持ちを想起しワークに記入させ、誰もがよいところをもっていることに目を向けさせる。 ○資料を基によさについての感想を書く。 自分を含め誰もがよさをもっていることに気付くことができる。

事前と事後に行ったアンケートでは、「自分によさはありますか」という質問に対し、授業前には、45%(19名)の児童が自分のよさについて「ない」と答えていたが、授業後には、全部の児童が「自分にはよさがある」という記述が変わった(図6)。

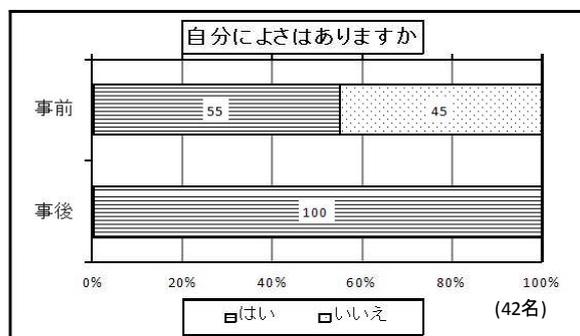


図6 自分のよさについての意識の変容

次頁図7は、K児の変容である。K児は、授業の前のアンケートでは自分のよさについての記述ができていなかった。しかし、K児の実態に合ったねらいでの学習により、「自分のよさはあきらめないところ」という記述ができていた。このことから、ねらいや資料を別にしたことで、実態に応じた児童の興味・関心や考え方、感じ方の違



右図は、R児の意識の変容である。これを見ると「個性伸長」を扱う第3時目以前は、自分のよさを記述できていなかったが、第3時目において自分や友達のもつよさに気付き、自分のよさを記述できるようになった。さらに、第4時目においてペア活動を行わせたことで「自分の長所を伸ばして、夢に向かってあきらめないでいきたい」という考えに変わっていった。異学年の児童同士で行うペアでの交流活動が、自らの価値観を深め実践意欲につなげていく手立てとなったことが分かった(図11)。

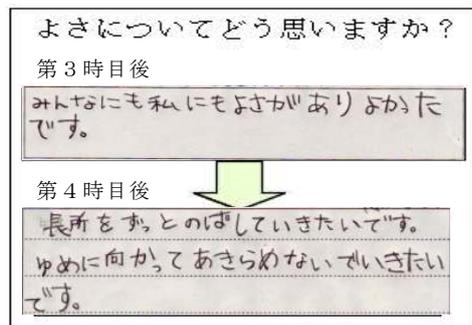


図11 第4時目後のR児の回答

(イ) 縦割りグループ全体での交流活動(5, 6人組)

検証授業の第2時目及び第3時目において縦割りグループの交流活動を仕組んだ。第2時目では、展開後段において「学校を愛する気持ち」についてそれぞれが考えたことを紹介し合う活動とした。A児は、異学年での意見交流前に「秋の音楽さいで失敗しないで発表したい」という考えをもっていた。A児は意見交流を通して、自分の考えに友達の考えを書き加え、「秋の音楽さいで、はやくなったり、ばちを落とさないようにしたい。学校をきれいにしたい。あいさつをがんばる」と、考えを見つめ直した意見を書いていた(図12)。右図は、実際のA児の記述である。異学年グループでの交流活動を通して、始めの自分の考えを具体的に記述し、更に友達の考えも取り入れていった。これは、他の児童の価値観に触れたことで道徳的価値について深く考えることができたからである(図13)。

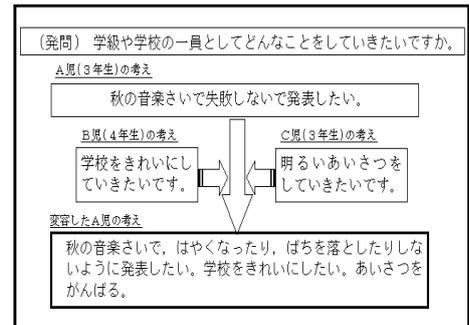


図12 変容が見られたA児の考え

また、3年生T児は、異学年合同で意見交流をさせたことで、「4年生の話聞いて、4年生らしくていいな」という感想をもった(図14)。異学年での学習のよさを十分見いだせていない児童には、更なる教師の明確な働き掛けがあれば、他者理解と自己理解につながっていくと考える。



図13 実際のA児の記述

これらのことから、道徳の時間の中で異学年の児童を互いに交流させていけば、児童は、友達の考えと自分の考えの共通点や相違点を明らかにしながら話し合うことができ、更に学年を越えた考え方のよさに気付くことができると言える。

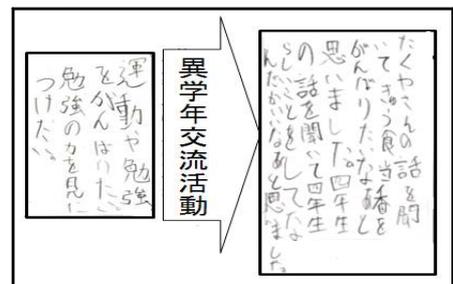


図14 3年生T児の記述

また、話合いが深まることで、ねらいとする道徳的な見方や考え方、感じ方を自分の生き方との関わりで捉えることができ、道徳的価値観が深まっていくといえるであろう。

ウ 検証授業後の児童の意識の変容

検証授業を終えて、授業でのワークシートや事後アンケートを基に、児童の意識調査を行った。「愛校心」の内容項目では、「よい学校や学級にするためにできること」について尋ねたところ右図の結果となった。付け加えた児童も合わせて74%(31名)の児童の考えに変容が見られるようになり、自らの考えを深めていくことができたといえる(図15)。変容のなかった児童の中にも、考えが具体的になってきた児童が多かった。また、

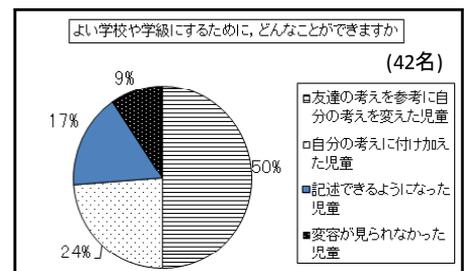


図15 「愛校心」について

「個性伸長」の内容項目において道徳的価値観の深まりを見ると、どの児童も自分のよさについて記述できるようになり、始めの自分の考えを変えたり、具体的に記述できたりするようになってきた。さらに、そのよさについて、「今後伸ばしていきたい」、「もっとよさを増やしていきたい」といった感想をもつことができ、道徳的実践力の高まりにつながったといえる(図16)。異学年で行う道徳についての意識調査を行った。この結果、対象児童は、同学年、他学年の交流が深まることで、異学年同士で交流するよさについて感じているといえる(表8)。これは、異学年で行う道徳についての児童の感想にある、「たくさん交流できてよかった」の意見に代表されるように、同学年、他学年の友達の感じ方や考え方に気付くことができたからであろう(表9)。これらの結果から、人に積極的に関わるようになり、児童一人一人の道徳的価値観が深まっていったといえるであろう。

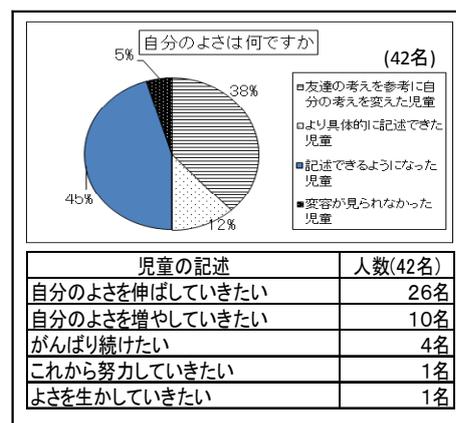


図16 「個性伸長」について

表8 異学年で行う道徳のよさ(42名)

児童の回答	検証授業前	検証授業①後	検証授業②後	変容した児童の主な記述
道徳の時間が好き	76%	88%	95%	・友達のいいところがいっぱい見つかる。 ・劇などがおもしろかった。
友達と話し合うことが好き	69%	90%	90%	・書いたことが相手の心に伝わる。 ・友達の考えが参考になる。
異学年で行う道徳が好き	64%	64%	81%	・なるほどという意見がたくさん出る。 ・違う学年のことが分かる。
自分の考えを発表することが好き	36%		56%	・自分の考えを知ってもらえる。 ・みんながしっかり聞いてくれる。

表9 異学年で行う道徳についての感想  
異学年で道徳を学習してどんなよさがありましたか

<ul style="list-style-type: none"> <li>・たくさん交流できてよかった。</li> <li>・意見がいろいろ出てきた。</li> <li>・3年生と4年生が仲良くなった。</li> <li>・3年生のがんばっていることが分かった。</li> <li>・4年生が分かりやすく教えてくれた。</li> <li>・お互いのことがよく分かった。</li> </ul>
---

## 7 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

本研究を通して、次のことが明らかになった。

- ・ 担任同士の場合演習や児童の実態に合わせた資料の提示など、TTでの指導方法を工夫すれば、活動場面が想起しやすくなったり、資料内容が理解しやすくなったりする。このことで自分の考えを発表しやすくなるといえる。
- ・ 異学年で組んで行っている学校行事等の体験活動と道徳の時間を関連付け、異学年の児童同士を意図的に交流させていけば、児童は、多様な価値観に触れることができ、自らの道徳的価値観を深めることができるといえる。

### (2) 今後の課題

- ・ TTでの効果的な指導形態や授業構想の工夫について、今後も研究する必要がある。
- ・ 異学年の児童同士での交流活動で出てきた多様な価値観を、全体的話合いでどのように生かしていくか研究する。

### 《引用文献》

- 1)2) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説道徳編』 平成20年 東洋館出版 p.80  
p.90
- 3) 永田 繁雄 『研究授業 小学校道徳』 2004年 明治図書 p.11
- 4) 生越 詔二 『小学校道徳ティーム・ティーチングの実践』 1998年 明治図書  
p.7

### 《参考文献》

- ・ 道徳教育改善研究会 『ポイントと授業づくり道徳』 平成21年 東洋館出版